

# ただ一人のために 挽歌に思う 藤島秀憲

短歌はただ一人の死者をうたうのに適した詩型である。東日本大震災以後、大勢の死者に向けての挽歌を見かけるが、一首で多くの死者を鎮魂することなど出来ないと思う。ひとりひとりの生を思い、ひとりひとりの死を見つめなくては鎮魂は叶わない。多数の死があるのではなく、ただ一人の死が多数あるのだ。

・誰のこゑも聞こぬ家になりたれば野良猫引き入れてしきりに喋る  
永田和弘「短歌研究」8月号

・あなたとふやさしき呼び名に呼ばれることこの後のわれに無きさびしさよ

・新聞はここ二日ほど読まざりき母の通夜終え月食に遇う

大下一真『月食』

・悲しみと言葉に出せば単純の母なきうつつを白萩そよぐ

・いくたびも「パパかはいそう」と言ひたると看護婦さんに後に聞きたり  
小池光「短歌研究」8月号

・ああ和子悪かつたなあとこゑに出て部屋我真ん中にわが立ち尽くす

ただ一人の死をうたっている点は三人とも同じだが、永田の歌は「あふれ出る悲しみ」、大下の歌は「にじみ出る悲しみ」、小池の歌は「しぼり出す悲しみ」から出来ているように感じる。

永田は言葉を交わす人の不在として妻を詠む。野良猫に喋ったところで所詮は一方通行。短歌にうたえば読者は確実に受け止め

てくれる。受け止めてくれるという安堵感が言葉をあふれ出させているのだらう。

大下は享年九十一歳の母をうたう。住職だからというよりも、母が長生きしたことに起因するのか、どこか達観した雰囲気がある。だが、自然現象や植物に感情を託しつつも、隠しきれない悲しみがにじみ出て来ている。

小池の歌は受け入れがたい妻の死を確認しているような作品である。ひとつひとつの確認作業によって、胸にたまっている悲しみをしぼり出している印象を受ける。

被災地の子どもに震災当日のことを作文に書いてもらうと、言葉があふれ出て止まらなくなる子どもがいる一方で、一行も書けない子どもがいるという。書けない子どもも大半が、あの日のこととは思いつく口をつぐむそうだ。PTSD（心的外傷後ストレス障害）を発症しないためにも言葉は溜め込まないほうが良いといわれているのだ。

・夜明かしの車中にみちるアンパンマンの歌にやうやく涙あふれる  
斉藤梢「棧橋」107号

・桜餅のさくらの色の懐かしさひとりにひとつの配布に並ぶ  
被害の大きさやその後の緊張と苦勞で泣くことすら出来ずにいた被災者の生の声。アンパンマンの歌は世代を超えて人々の心に届いた。季節感のある食べ物を求める人々は、自然に苦しめられても自然を愛する日本人の姿である。

挽歌を詠むということは自分が生きていることの確認であり、生きていくことへの意志でもあると、思う。同じように、被災者が自らの体験を歌うのも生きていることの確認と意志であるようだ。言い換えれば、あの日の自分への挽歌なのである。